

銀の道探訪マップ②



美郷町石原

美郷町小松地、飯南町下赤名編

大森の代官所を出発しておよそ八キロ、大田市と邑智郡美郷町の境界となる所に松の古木が見えてくる。この松を「箱茂のお松」といい、かつては旅人が一休みする場所だった。ここから飯石郡飯南町下赤名まで約二八キロにわたって銀の道の名残を示す数々の史跡が残っている。この区間は街道の形状がそのまま残っている部分があり多く、中でも「八名塩道」と呼ばれる約六キロのコースは、車は通れないが、古道の雰囲気は充分味わえる。

- この区間の主な見どころ
- ・箱茂のお松
 - ・八名塩道（茶店跡、十王堂跡）
 - ・鴨山
 - ・八名塩坂
 - ・石畳のあった坂道
 - ・川番所跡
 - ・石原の古道
 - ・九日市本陣跡
 - ・ふるさとのおち伝承館
 - ・橋台岩
 - ・酒谷番所跡
 - ・赤名湿地
 - ・芋代官の碑
 - ・小原の河原
 - ・本陣跡
 - ・半駄の峡
 - ・西の原古道
 - ・シャクナゲ
 - ・酒谷の名水
 - ・江戸時代の農家
 - ・長者原古墳



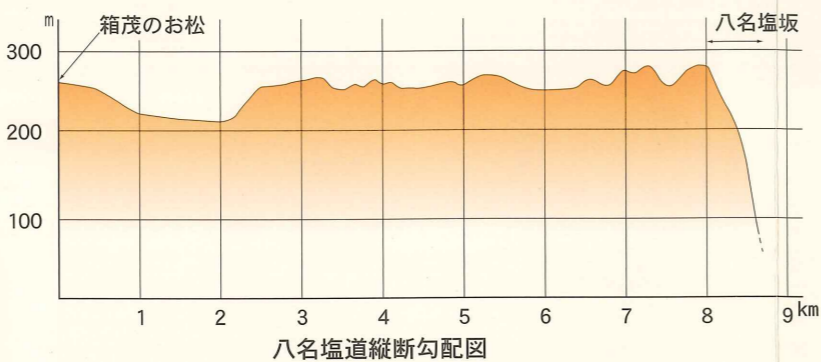
八名塩（やなしお）道

箱茂の松からおよそ二キロ行くと、なだらかな尾根筋に古道がほほ昔のまま残っている。ここから粕淵に向けての山道を地域の人は「八名塩道」と呼んでいる。道の脇には十王堂と呼ばれるお堂の跡や茶店らしき建物の跡が残っており、かつては街道の要衝として賑わっていたことが想像できる。



発掘調査が行われた八名塩道

八名塩道に関しては一三五四年の古文書に記述が見られ、江戸時代以前にはすでに存在していたことが確認できる。尾根すじの道を小原の宿に向かってしばらく進んでいくと、一転して急な坂道を下りていくことになる。ここが街道の難所として知られた「八名塩坂」で、あまりにきついため荷物運びの人足賃の割り増しが認められていたという。



人麻呂伝説

万葉の歌人、柿本人麻呂死亡地については様々な説があり、謎が多い。最近では哲学者の梅原猛氏が益田市沖に沈んだとされる鴨島をその地としている。この周辺ではアララギ派の歌人、斎藤茂吉が唱えた「鴨山説」が良く知られている。



鴨山

「鴨山の巖根し巻けるわれをかも知らにと妹が待ちつつあらむ」

という人麻呂の和歌に出てくる鴨山という地名が美郷町湯抱（ゆがかい）の奥にあったことを根拠に、人麻呂の死亡地は美郷町であると彼は結論づけている。



斎藤茂吉鴨山記念館



湯抱温泉



華谷生誕地の碑



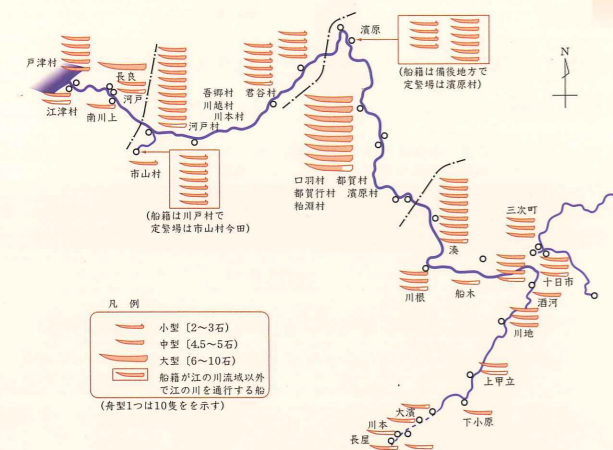
原田屋の石垣

佐和華谷（さわかく）

江戸時代に儒者として活躍した華谷は、一七四九年に九日市の本陣である原田屋で生まれている。多感な青年時代に遊学し画を中林竹洞に学び、この時期同じく京都に遊学中であった頼山陽らとも交友した。また日本地図を作成した伊能忠敬が、文化八年に測量調査でこの地方を訪れた際、わざわざ原田屋に立ち寄り華谷を訪ねている。その時華谷は留守で、会見はかなわなかったという。儒者としての華谷は、華齋、五鹿洞などの号をもつが、通称は原田屋庄太郎といい、その名前で大森町の五百羅漢の内に一体を寄贈している。

江の川舟運

江の川の勾配は意外と緩い。河口からおよそ一〇キロ上がった三次あたりで、標高はわずかに一〇メートルだから、河川勾配はおおむね千分の一となる。このことは江の川に舟運のルートと奥地まで発達させる大きな要因となった。舟運がいつ頃から始まったのかは不明だが、中世には流域全体に広がっていたと思われる。江戸時代までは石見銀山からの抜け荷を監視する川番所があったため、三次から江津まで全域を通して行き来する舟はなかったと見られている。明治になって、藩を越えて交易することが可能になり、舟運は急速に発展することになった。主に上流域では小舟、下流域では大船が使われた。明治二〇年代の船籍を見ると、大船は口羽から粕淵に多いことがわかる。



明治20年代の船籍図



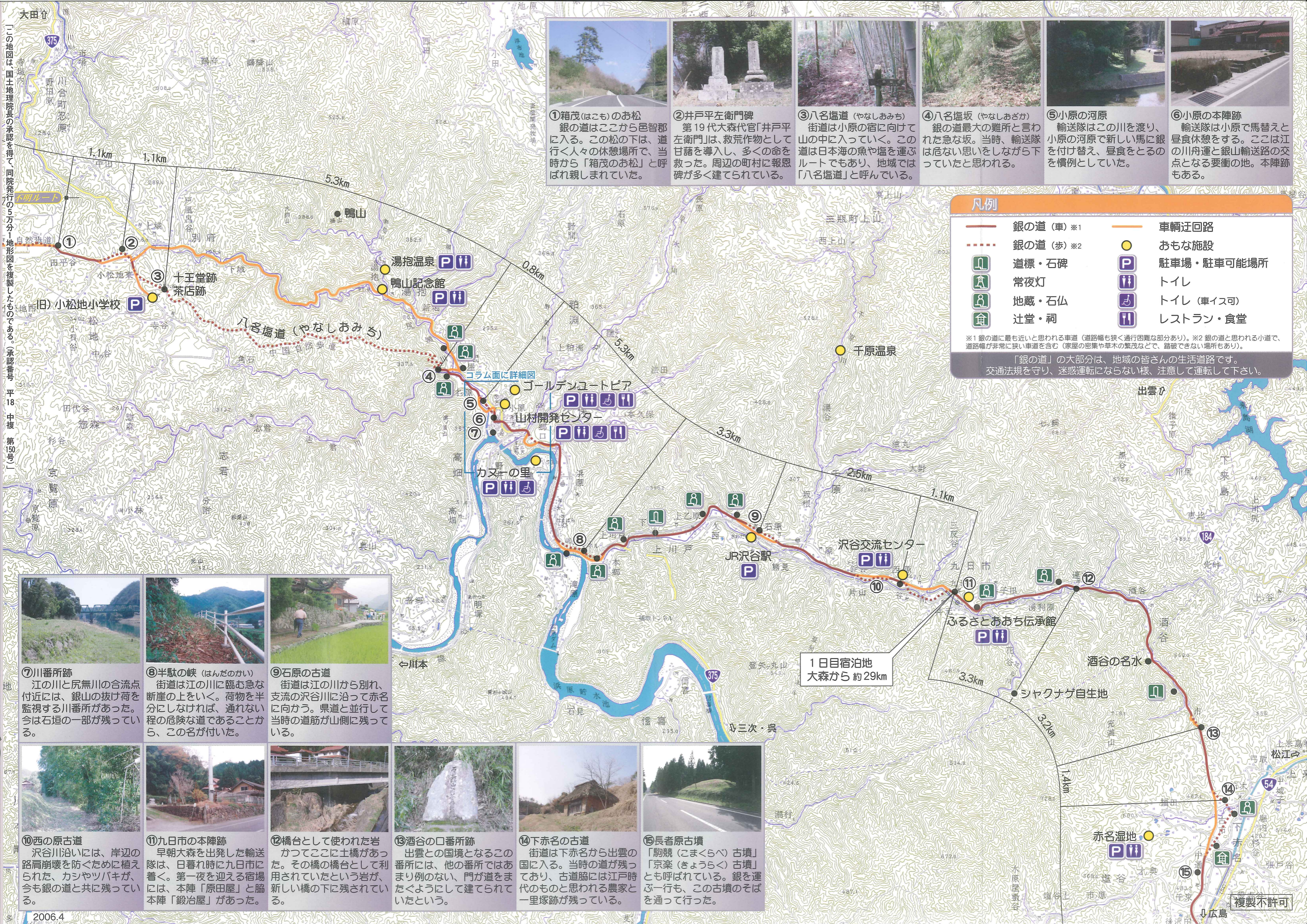
かつて江の川舟運で活躍した大舟

主な連絡先

- 美郷町役場 0855-75-1211
- 美郷町教育委員会 0855-75-1217
- 美郷町観光協会 0855-75-0805
- 斎藤茂吉鴨山記念館 0855-75-1070
- 沢谷交流センター 0855-75-1920

銀の道関連ホームページ

- 石見銀山街道「九日市宿」
<http://ryoutettan.com/rekisi-ginnzannkaidou.html>
- 江戸時代島根の街道
<http://www.pref.shimane.jp/section/rekimichi/index-g.html>



①箱茂(はこも)のお松
銀の道はここから邑智郡に入る。この松の下は、道行く人々の休憩場所で、当時から「箱茂のお松」と呼ばれ親しまれていた。



②井戸平左衛門碑
第19代大森代官「井戸平左衛門」は、救荒作物として甘藷を導入し、多くの命を救った。周辺の町村に報恩碑が多く建てられている。



③八名塩道(やなしおみち)
街道は小原の宿に向けて山の中に入って行く。この道は日本海の魚や塩を運ぶルートでもあり、地域では「八名塩道」と呼んでいる。



④八名塩坂(やなしおさか)
銀の道最大の難所と言われた急な坂。当時、輸送隊は危ない思いをしながら下っていたと思われる。



⑤小原の河原
輸送隊はこの川を渡り、小原の河原で新しい馬に銀を付け替え、昼食をとるのを慣例としていた。



⑥小原の本陣跡
輸送隊は小原で馬替えと昼食休憩をする。ここは江の川舟運と銀山輸送路の交点となる要衝の地。本陣跡もある。

凡例

- 銀の道(車)※1
- - - 銀の道(歩)※2
- 📍 道標・石碑
- 🏠 常夜灯
- 🗿 地蔵・石仏
- 🏪 辻堂・祠
- 🚗 車輦迂回路
- 🟡 おもな施設
- P 駐車場・駐車可能場所
- 🚻 トイレ
- 🚻 トイレ(車イス可)
- 🍽️ レストラン・食堂

※1 銀の道に最も近いと思われる車道(道路幅も狭く通行困難な部分あり)。※2 銀の道と思われる小道で、道路幅が非常に狭い車道を含む(家屋の密集や草木の繁茂などで、踏破できない場所もあり)。

「銀の道」の大部分は、地域の皆さんの生活道路です。交通法規を守り、迷惑運転にならない様、注意して運転して下さい。



⑦川番所跡
江の川と尻無川の合流点付近には、銀山の抜け荷を監視する川番所があった。今は石垣の一部が残っている。



⑧半駄の峡(はんたのかい)
街道は江の川に臨む急な断崖の上をいく。荷物を半分にしなければ、通れない程の危険な道であることから、この名が付いた。



⑨石原の古道
街道は江の川から別れ、支流の沢谷川に沿って赤名に向かう。県道と並行して当時の道筋が山側に残っている。



⑩西の原古道
沢谷川沿いには、岸辺の路肩崩壊を防ぐために植えられた、カシやツバキが、今も銀の道と共に残っている。



⑪九日市の本陣跡
早朝大森を出発した輸送隊は、日暮れ時に九日市に着く。第一夜を迎える宿場には、本陣「原田屋」と脇本陣「鍛冶屋」があった。



⑫橋台として使われた岩
かつてここに土橋があった。その橋の橋台として利用されていたという岩が、新しい橋の下に残されている。



⑬酒谷の口番所跡
出雲との国境となるこの番所には、他の番所ではあまり例のない、門が道をまたぐようにして建てられていたという。



⑭下赤名の古道
街道は下赤名から出雲の国に入る。当時の道が残っており、古道脇には江戸時代のものと思われる農家と一里塚跡が残っている。



⑮長者原古墳
「駒競(こまくらべ)古墳」「京楽(きょうらく)古墳」とも呼ばれている。銀を運ぶ一行も、この古墳のそばを通って行った。

1日目宿泊地
大森から約29km